

原発事故由来の  
内部被ばくによる発がん

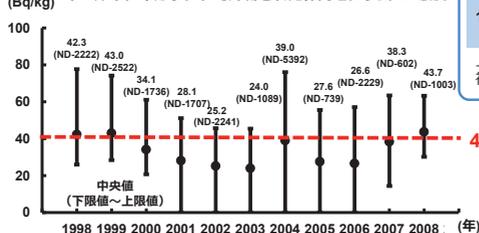
# チェルノブイリ原発事故によるセシウム137の内部被ばく



体内のセシウム137濃度の  
季節ごとの変化 (Bq/kg) と被験者数

	1998~2001年	2002~2005年	2006~2008年
3~5月	34.6 (ND-2154.9) 10,993	27.3 (ND-5392.2) 18,722	32.0 (ND-1757.1) 9,284
6~8月	71.5 (ND-399.0) 265	32.2 (ND-393.0) 268	21.2 (ND-271.1) 451
9~11月	40.9 (ND-2521.7) 9,590	33.5 (ND-1089.3) 8,999	44.2 (ND-2229.3) 4,080
12~2月	33.5 (ND-1735.8) 8,971	20.6 (ND-607.0) 6,603	39.8 (ND-1454.3) 6,404

(Bq/kg) ホールボディカウンタで計測された体内セシウム137濃度



上から平均値 (Bq/kg)、(検出下限値~検出上限値)、  
被験者数 (人)。NDは検出限界以下。

ブリヤンスク州では、  
1998 ~ 2008年の間、  
平均40Bq/kgの  
内部被ばくを認めた

Bq/kg : ベクレルキログラム

出典 : Sekitani et al., Radiat Prot Dosimetry, 141, 1, 2010より作成

1986年におこったチェルノブイリ原発事故では、福島第一原発事故よりもはるかに大量の放射性物質が放出されました。事故当初、ソビエト連邦はこの事故を公表せず、施設周辺住民の避難措置などがとられませんでした。また、事故が起こった4月下旬には、旧ソ連の南部地域ではすでに放牧が行われていたため、牛乳の汚染などが起こりました。

1998年から2008年の間、ホールボディカウンタを用いて、ブリヤンスク州の住民のセシウム137の体内放射能を測定した結果、期間中の体内セシウム137の中央値は20~50ベクレル/kgで推移しつつ、2003年まで低下していましたが、2004年から上昇傾向がみられています。セシウム137による被ばくは長期にわたって続くことがわかります。

本資料への収録日 : 2013年3月31日

改訂日 : 2015年3月31日